有孔玉、石斧をめぐって

林　巳奈夫

【要約】 中国では新石器時代から板状の斧の刃に円い孔のある類があり、青銅器の発達する殷、西周時代にもその伝統がたどられる。孔は刃が柄から抜け落ちるのを防ぐ機能を持ったに違いないが、そのためのものとしては過度に大きなものが早くからある。象徴的な意味があったからである。孔の周囲や孔から上方三方向に線を引いものが古くより知られる。前三千年紀の遺物で孔の下に当時の神の顔を刻した遺物の存在が知られた。これによって孔はこの神の象徴する日、月の光明の象徴であることが確かめられた。殷、西周時代にも青銅製の有孔斧が作られ、首切り用の大型品がある。孔の所が虎の口や鮫の口に作られるものがあり、虎の口の代りに虎やスッポンの全身像が象られる例もある。夫々刑殺、大陰の星座の神である。孔のあるべき所が「明」を意味する図柄になった例もある。いずれも「明畏」（善を顕わし、悪を威す）という意味をもったものと考えられる。

史林　七九巻五号　一九九六年九月

はじめに

中国の殷周時代の刃が板状の斧頭で、円い孔の穿たれたものがあり、揚子江下流の新石器時代にもその類が顕著である。中国以外の地域にはないもののようである。[1] 本論文の頁を操ってみればすぐ知られるように、実用的なものとして始まったにしても、過度に大きな孔のものがある。孔に象徴的な意味がある所から、次第に孔ばかりが発達したとしか考えられない。中には斧の板状の部分は、孔を囲む輪廓でしかない、といったものも出てくる（図28）。一体この孔は何を意味したものだったのか。これは筆者の長年の疑問であった。最近その解答を得たと考えるに至った。以下に記すごとくである。

① 佐原一九九四に出てこない。

一　殷西周時代

殷時代の有孔斧の青銅製品で時代の遡るのは図1である。黄陂盤龍城李家嘴二号墓の出土品で、二里岡期の大型墓（壙底約三・八×三・四m）である。[1] この器は上下四一cm、刃の幅二六cmの大型品で、同墓からはこれの三分ノ二ばかりの大きさの素紋の青銅有孔斧も出ている。[2] 持主は二里岡文化の時代に中央から任命され、今の武漢の近くの盤龍城の地で睨みを利かせた将軍だったのであろう。この斧はまつろわぬ者共の首を撥ねる刑罰用の道具で、鉞と呼ばれたものである。[3] 小型の方は、大型の方が重すぎるから、日常持ち歩くための略綬のようなものであろうか。図1で孔の上にある紋様は青銅彝器にも使われるもので、甲骨文「良」字に象られる類である。魁甔と呼ばれた鬼神である。[4] 孔の両側にある紋様は他に例がない。これらがここに飾られている意味は今の所具体的に説明し難い。しかしこれらの鉞の紋様の主役が大きな円孔であることは言うまでもない。

それでは円い孔が何を象徴したか。首斬り斧の紋様であるから、それを見ただけでぞっとするような、「殺」といった内容であったことは疑いない。図2は益都（今の青州市）蘇埠屯の殷後期墓発見の鉞で、上下三二・七cm、刃の幅三四・五cmある。口を凹字形に曲げ、歯をむき出した大きな顔が附けられている。刑を司る神であることは疑いない。このロでばっくり咬み殺すぞ、という姿である。

図3は新淦大洋洲一括出土品中のものである。ここから出土した青銅器は華北の殷文化の伝統を伝えているが、実年代は西周中期に降すべきものである。[5] これは二枚出土した[6]同紋の鉞の一枚。上下三六・八cmで図2の神面の代りに尖った歯の並んだ口が附けられる。こういう歯の並んだ口は同じ新淦出土の青銅卣の提梁の下端に飾られた犠首にあり、[7] 殷後期の匜の蓋の注口に当る所に大きく飾られた饕餮に見る所である。図4、5は後者である。この類の饕餮の尖った鼻先は、以

図2　青銅鉞　殷後期　益都蘇埠屯

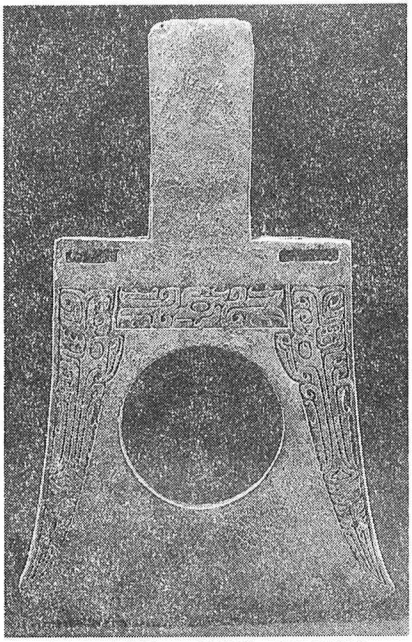


図1　青銅鉞　二里岡期　黄坡盤龍城

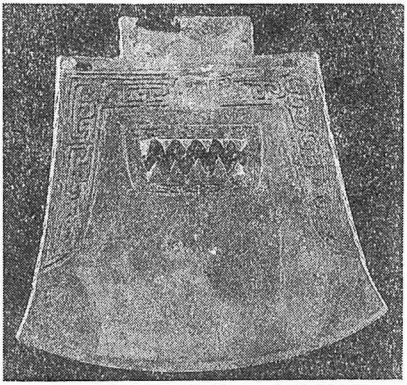


図3　青銅鉞　西周中期　新淦大洋洲

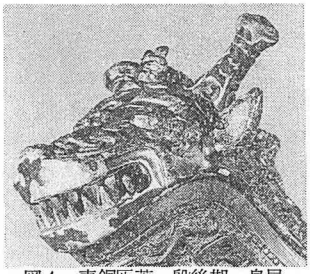


図4　青銅匜蓋　殷後期　泉屋博古館　樋口隆康氏撮

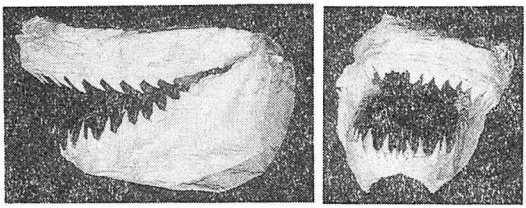


図6　ヨシキリザメの歯

図5　青銅匜蓋　殷後期　藤田美術館

図8　青銅鉞　殷後期　鄭州人民公園15号墓

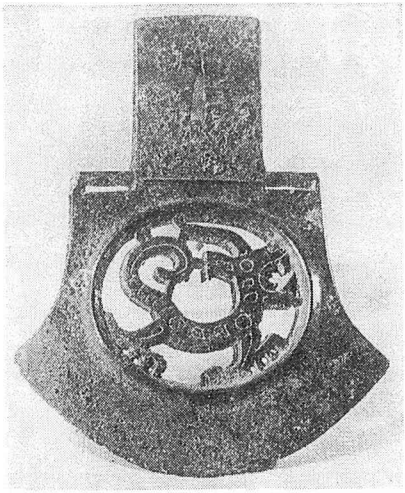


図7　青銅斧　殷後期　城固五郎廟

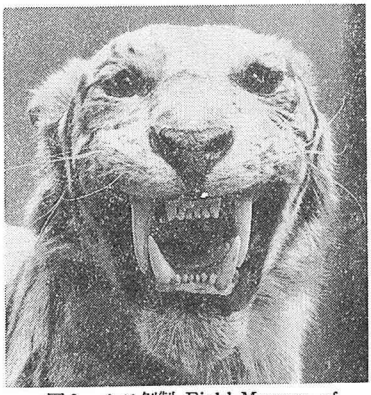


図9　トラ剝製 Field Museum of Natural Histry

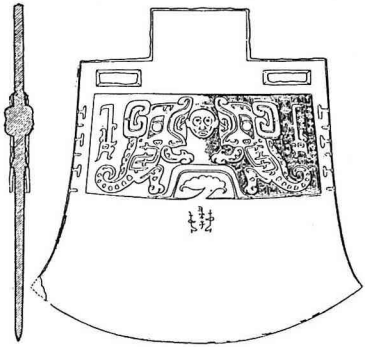


図10　青銅鉞　殷後期　殷墟婦好墓

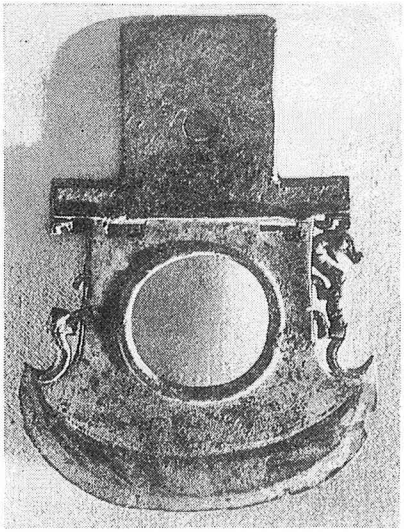


図12　青銅斧　西周前期　洛陽北瑤龐家溝278号墓

図11　青銅斧　西周前期

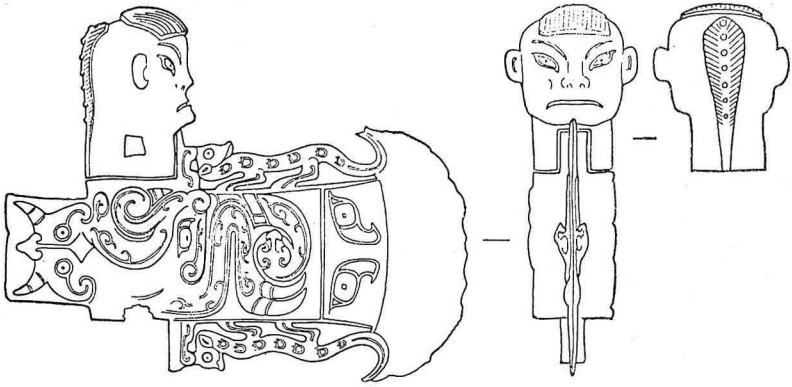
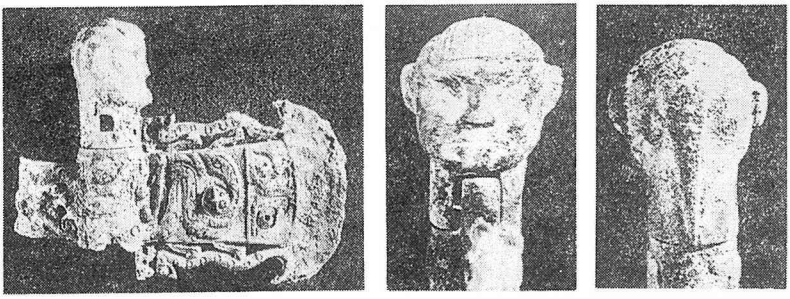


図13　青銅斧　西周前期宝雞竹園溝13号墓



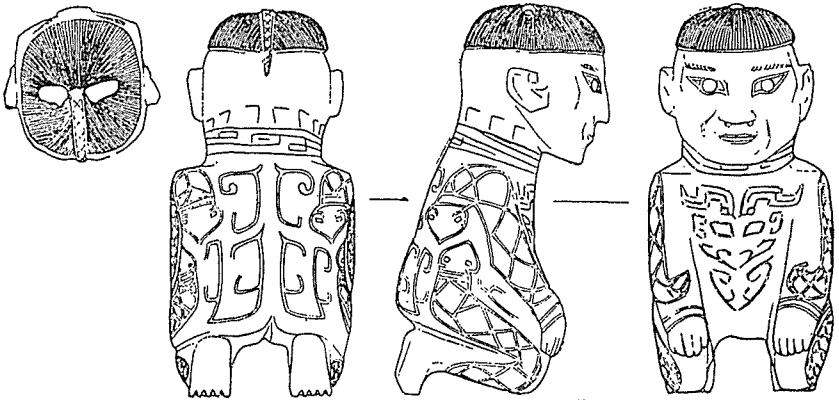


図14　玉神像　殷後期　安陽婦好墓

前に記したように、[8]鼻先に針のような形の刺の出た百歩蛇という猛毒の蛇の鼻先から変化したものであるが、この歯はこの蛇のものではない。その後気附いたのであるが、これは鮫の歯を象ったものである。鮫は淡水の河を奥地まで溯上することはないが、鮫の三角形の歯は良渚文化で道具として利用されたらしく、その墓地から間々出土する。[9]恐らく歯の生えた口についての知識は普及していたと考えてよい。

図6はヨシキリザメ（*Prinace glauca*）の上下顎の骨である。[10]これは拳ほどのものであるが十分迫力がある。猛虎などと聞いても日本には生息しないため、ただ想像するだけであるが、鮫となると我々には実感がある。海中でこれが出てくれば先ず助からない。手でも足でも一咬みで食い千切られ、あとは鮫の飼食である。鮫の威力を示すためには図3のように尖った歯の並んだ口だけで十分である。ジョーズという鮫の映画の広告がそうであった。図1の円い孔は図2の恐しい刑神、図3の鮫の口と同様な「殺」の威力を象徴したことは疑いない。

殷周時代の有孔斧の孔が首斬り用の大型の斧、鉞にも附けられて、その威力を象徴したことを知れば、図7のようなデザインも理解することができる。この器は一九六四年城固五郎廟の出土で、少々泥くさい作であるが殷後期の瓿と同出している。孔の中に動物が入っている。身体には鱗紋が附けられるが、尾には虎の縞がある。大きな犬歯のある口を開く。虎の口には図9の剥製に見る

ように、上下に喰い違った巨大な犬歯ばかりが目立ち、他の歯はそれに比べて異常に小さい。図7の動物の口は、この虎の特徴を表現している。目の上から長いものが立つのは、饕餮など殷周時代の鬼神が鼻筋に附ける箆形の飾りと思われる。神化された虎と見てよいだろう。西方の宿で最も目立つ白虎の星座を表わすと見られる。

『史記』天官書に「オリオン座の参が白虎の宿である。三つの星（δ、ε、ζ）が真直に並ぶものは衡石（はかり）である。下に三つの星（c_1、θ、ι）があるのは兌で罰の意味があり、斬艾（斬り殺すこと）をとり行う。その外の四つの星は虎の左右の肩と大腿である。小さい三つの星（λ_1、ϕ_1、ϕ_2）がその北の方にあるのは觜觿（という星座）で、虎の頭である」[11]という。寒さが到来して草木が枯れてゆく秋から冬の夜空に君臨するオリオンの星座が虎に見たてられ、その中に斬艾のことを司る兌の星が含まれていることは、もっともなことと思われる。

図7に示した斧は、円い孔の中に虎が表わされているので先に引いたが、こういう表現は例外的である。普通にあるのは図8のようなものである。これは殷後期のもので、上下一七cmの中型品である。[12]斧身の上部寄りに大きく開いた虎の口が凹字を逆さにしたような形に表わされ、中に巨大な牙がぶつ違いに表わされている。図7の虎の口の所だけを拡大したようなものである。その両側に側視形の顔があり、口の上辺にその下顎が羽根を使って表わされている。図3ほど極端ではないが、要は牙の附いた口が主なテーマで、それ以外は写実からは遠い、無理な表現を使った附け足しである。

図10は殷墟婦好墓の出土で、上下三九・五cmの鉞である。上半の紋様帯の中央に、前図と同じ方式の口が表現されるが、これに附属する顔はない。代りに頭でっかちの虎が一対、これに前肢をかけて立ち上り、虎の口の間に坊主頭の人頭がある。人間乃至人頭と虎が近接して表わされる図像は殷から漢まで例が少くない。両者がどういう関係にあるかについては以前に筆者がとり上げて論じたことがあるので、[13]ここには操返さない。一言で言えば、人間形の神はこの時代には大物の動物形の神に対し、その役割を補助する任を持った小者の神であったと考えたのである。図10の場合では虎の口が中心になり、そこに虎形の神が一対前肢をかけ、間に仲間の人間形の神も顔を見せている、というテーマである。

図11は出土地不明の遺物であるが、西周前期で中期に近いものと思われる。刃の上部に虎が頭の形で飾られ、下に円孔がある。刃の両側に几字形の羽冠を持った龍が飾られる。刃の両側に同形の龍を飾った斧に図12がある。虎の頭がなく、その代り孔だけが大きく表わされている。虎は消えても、孔だけでもよかったことが知られる。

図11、12と同じように両側に几字形の羽冠を附けた龍を飾った斧に、図13がある。宝雞竹園溝一三号墓の出土で、この墓の青銅彝器は西周前期後半のものである。刃には二つの大きな目、百歩蛇形の神等を飾るが、柄頭には別鋳の人頭形の像を嵌めている。刃を敵に向けると、この人頭が敵を睨むことになる。目尻が釣り上り、口をへ字形に曲げた怖い顔である。前髪はおかっぱに切り揃えられ、頭の後には編んだ髪が垂れているが、他の部分は剃られていると見られる。

和林格爾新店子発見の後漢墓壁画中に似た風俗の民族が画かれている。[14] 李逸友[15]はベンガラ色の衣服を着け、頭を剃っている者の他、頭上に小さい髷を残す者、長い辮髪を垂す者がいるのは、『風俗通』に鮮卑は「皆髡頭（囚人の頭髪を剃ること）にして赭を衣る」というのに当る、としている。この風俗の人が大勢、両側を中国人が固める間を、門から列をなして膝行して入って来る、という光景である。図13の異様な風俗の人間は、この後漢の北方異民族の遠い祖先に違いない。『史記』匈奴伝には彼等の遠い祖先として、西周時代には犬戎が挙げられている。西周後期に周を脅かし、終にはこれを東方に追いやった民族で、当時の中国人にとって仇敵だった連中である。

ところで『史記』天官書に「昴は髦頭で胡である。白い衣冠の人の会合する喪事を意味する、[16]という。髦頭はすぐ後に引くように秦漢魏晋の近衛騎兵の兵種の名であるが、「髦」にはそれとは別の意味がある。以前に筆者が説明を加えたことがあるが、[17] 幼児の頭の剃り方で、一部の髪を剃り残す風俗、髫があり、成人が親に仕える時、それを象った髪の束を頭に着けるものである。後漢の鄭玄の頃には、その形はわからなくなっていたが、西周の玉人の頭に象られた几字形の飾りを資料に、筆者がそういう形のものであると推定したのである。図13の頭を剃り、一部を剃り残した風俗は、昔の中国の幼児の、髪を少し残して剃る髫と共通している。『史記』に「髦頭で胡だ」と言われたのはこの風俗ではないかと考えら

れる。

秦漢魏晋の近衛兵の髦頭の由来についての話は『後漢書』光武帝紀の注[18]に「秦の文公の時、梓樹が化けて牛となった。騎をもってこれを撃ったが勝たず、或る者は地に落ちた。髪が解けて被髪となった。牛は恐れて水に入った。秦はこれに因り、旄頭騎を置き、先導させた」という。

髦頭が怪物の牛を恐れしめる姿であった、という物語である。中国人の結った長い髪が解けたら、日本のお化けのように気持悪い姿になったと想像されるが、竹園溝の図20の人頭は大部分の髪が剃られ、残った髪も短く刈り込まれていて、大きな相違がある。しかしこのような髪も中国人は披髪と称している。前引李逸友の論文[19]に『南斉書』魏虜伝に魏の拓跋鮮卑について披髪と称する例が引かれている。

秦漢魏晋の近衛兵の髦頭は、その由来の伝説から考えて長い髪をばらけていたと考えてよい。しかしその伝説が何時出来たものか問題があろう。幼児の風俗と結びつけて説明される孝子の髦と、近衛兵の頭の髦とが結びつかないからである。一方、「髦頭、胡なり」の髦頭を先に記したように、図13のような髪形と解すれば両者が無理なく結びつく。このことによってこの方が原形と見るべきであろう。先の伝説は、鄭玄も記すように、髦がどのような形のものかわからなくなって後に生れたと考えたらよいであろう。なお更に想像すれば、幼児の髪の一部を残してあと剃ってしまう風習は、泣く子も黙る恐ろしい異民族を連想させる髪形を作り、疫病神を退散させよう、というような意図から生れたものと考えられないであろうか。

図13の武器の柄頭に附けられた髦頭の戎を象った像は、勿論ただの野蕃人の姿の兵士の像などではなく、敵をあの世に送る凶事の神の鼎を象ったものと見るべきである。この像が鼎の神の像とすると、婦好墓出土の図14も同じ神と見られよう。図13の神は額の上と後頭部以外は髪を剃っていると思われ、図14は毛の見えない部分が後頭部と耳の上に限られる点に相違があるが、短い髪、辮髪がある点共通している。この婦好墓の像は図13同様、鼎の神に違いない。図14の身体には

腕と足に鼻先の尖った百歩蛇が表現され、身体の前面に犠首、背面には羽紋があるものの、衣服は表わされていず、裸である。裸は殷周時代の人間形神像の特徴の一つであった。[21] 図14の像が裸で、従って神であることが知られれば、図13が近衛兵の髦頭でなく、鼎の髦頭であるとした先の判断が誤りでなかったことが裏づけられよう。

なお、図14が鼎の神、殺の神、喪事をもたらす神の像であるとなれば、それが両手、両足に百歩蛇の像を刻んでいる理由が明らかとなろう。この蛇は咬まれたら百歩歩く内に死ぬという恐ろしい毒蛇だからである。この蛇は図13の斧身にも浮彫で飾られる。他に鼎の柄頭飾はないが図13と同方式で同じ龍を両側に飾り、内端にも図13と同じ紋様――尖った鼻先を外に向け、長い牙をむき出した百歩蛇の頭――をつけた青銅斧があり、斧身に同様百歩蛇を飾る例も知られる。[21]

さてもう一度城固五郎廟にもどると、図15は図7と同じ所の発見であるが、一九七五年の出土である。発見の記録が公表されているかどうかは明かでない。刃に大きな円孔があり、頭を刃の方に向けてスッポン(鼈)が入れられている。解説に鼈の背に渦紋を飾ると記される。よく見ると、あるのは囧紋である。殷後期の青銅盤の内底に、背中に同じ紋様を附けた鼈を飾る例は多い。[22] 背中に囧紋を附けた鼈は二里岡文化から知られる。図22は鄭州白家荘二号墓出土の截頭尊の頸に飾られた図像記号である。

背中に囧の図柄の附けられた鼈は盤の内底の中央に飾られるものが大多数を占める。殷後期の盤が具体的にどのように使われたかについて、推測を加えるべき証拠は今の所見出すことができない。西周時代には銘文により、盤は匜乃至盉とセットで使われたことが知られる。水とか酒、香料を加えた液体で手などを清めるために使われたことは間違いあるまい。殷時代には匜など、注ぎかける器とセットになる例はない。洗面器のように深めのものの多い[23]ことも併せ考えると、そこに清めのための水などが汲み込まれて使用された想像される。

盤の底に鋳込まれた鼈は背中に紋様を附ける所から、勿論自然界に生息する生物ではなく、それを原形とした水神である。背中に囧(朗)を象る記号[24]を附けた鼈はそれに接する盤中の水を明(潔)[25]ならしめると信ぜられたであろう。

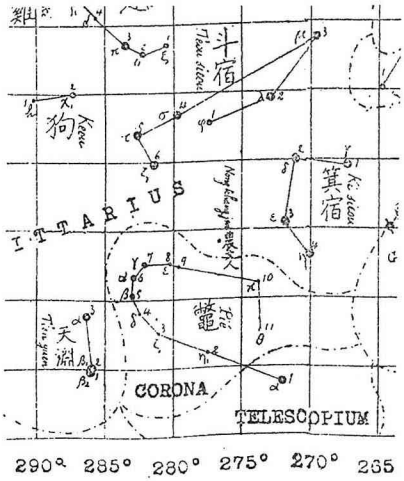


図16　鼈　の　星　座

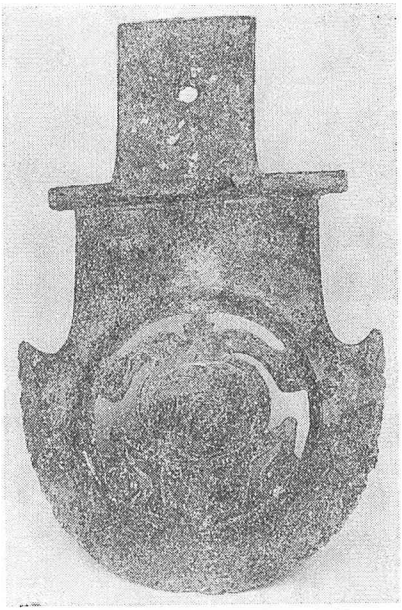


図15　青銅斧　殷後期　城固五郎廟

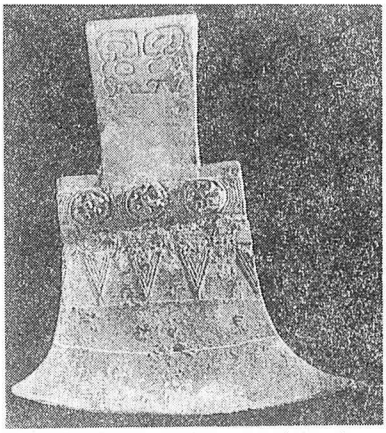


図18　青銅斧　殷後期　安陽戚家荘東
269号墓

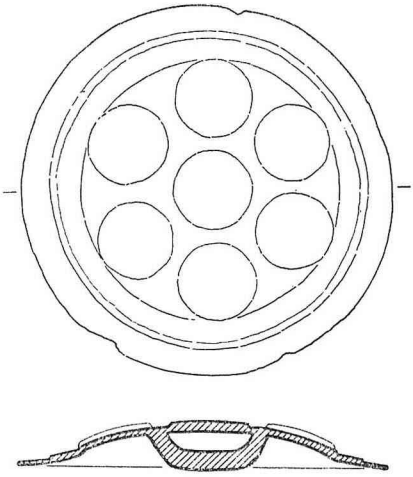


図17　青銅飾金具　殷後期　安陽侯家荘
1001号大墓

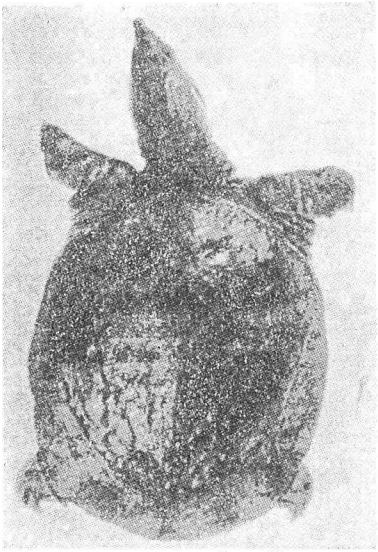


図20　山　　瑞　　鼄

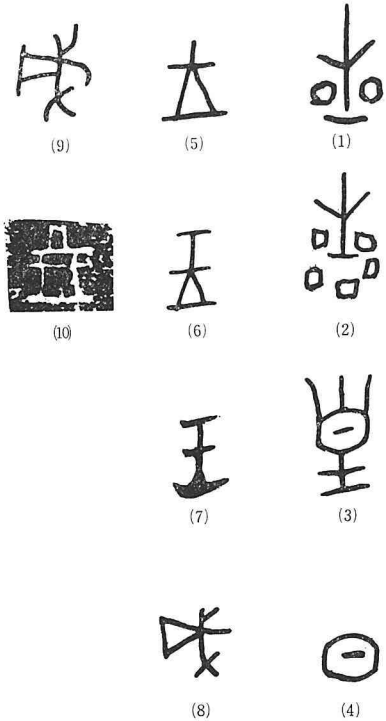


図19　引用甲骨文金文表

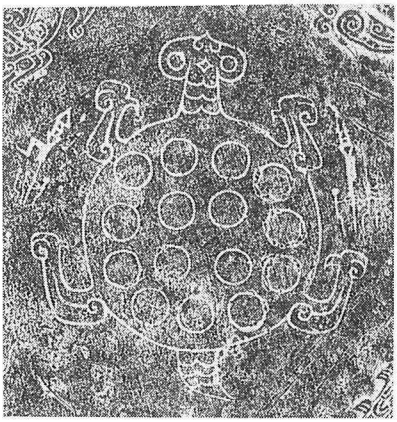


図21　鼄　殷後期　盤

図22　鼄　二里岡期　截頭尊
鄭州白家荘２号墓

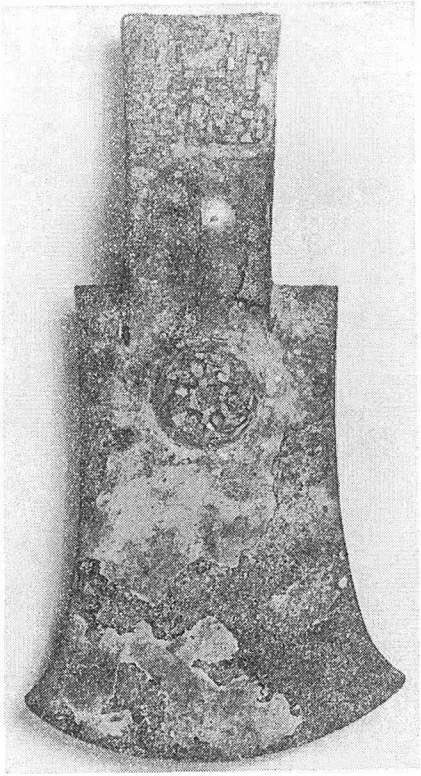


図25　青銅斧　殷後期

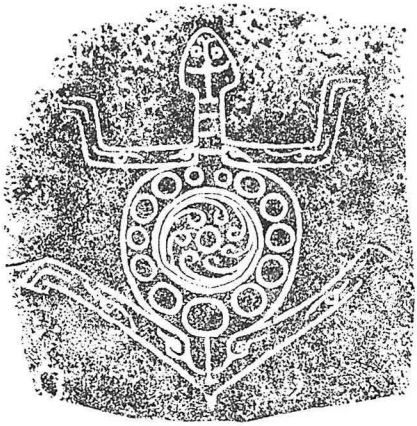


図23　鼉　殷後期　盤　清澗解家溝

図24　プレイアデス星団　平凡社『国民百科事典』より

この囧字に象られる図柄は龍山文化にこれを象った形の玉器があるなど、由来の古いものであるが、それが風車状にまとめられた単純な形の風切羽根を象るという成り立ちが知れらる以外、具体的にどういう内容を象徴したか明かでない。ただ中央が円い孔になり、後世「明」の字に使われる所から、以前日、月、星などの天体に由来すると考えた。右に見たようにこれが水器の内底の鼉の背に附けられ、それがまた青銅斧の円孔にも飾られるとなると、図7の虎形の神、昴と同列の神、後世の陰陽の分類で言えば陰に分類さるべきもの、月とか昴の方と考えるのが良いのではないかと考えられてくる。

陰の方の性質の天体で鼉と聞けば、確かにそういう星がある。『晋書』天文志に「鼉は十四星で南斗の南にあり。鼉は

水生動物で、太陰（最大限に陰の性質のもの）に分類せられる。新星が現れてここにとどまっていることがある時は、白い衣冠の人の会合する喪事がある。大水の際の号令を主る」[27]とある。図16で長めの楕円形に星が並び一一個の星が数えられている。星、星と考えて殷周時代の鼈の図像を検すると、図21に引いたように、複数の小さい円を背に附けた一類が見附かる。中国に棲息するスッポンでこの小さい円に当るものを背中に附けたものはない。中国のスッポンには山瑞鼈 *Trionyx steindachneri* 図20と鼈 *T. Sinensis* の二種があり、前者は頸の両側にいぼ状のものが固まってあり、背甲の前縁にいぼ状の粒が並ぶが後者にはこの両者がない、という相違がある。[28]後者の背は平滑、或いは小さないぼ状の瘤起が列をなして並び、[29]前者にも同様ないぼ状瘤起がある。[30]体長は二〇～四〇㎝ほどのものであるが、いぼ状のものは図20に見るように小さなもので、甲の周囲に寄った部分にあり、数も多くて図21の図像中の小円がこれを象った、ということは考え難い。先に筆者は図17、18のような小円の集合から成る紋様について、これを「星」を象るものと考えた。[31]すなわち、『説文』に星字は三個の日から成る晶に「生」の声符を附けた文字で、殷墟甲骨文字の二個の小さな四角形乃至五個の四角形と「生」とから成る字（図19(1)、(2)）は『説文』の星と同字と釈されているが、この小さな四角の集合が星（ほし）を象ると考えられる。そのような小さな星の集合した星といえば昴（すばる。プレイアデス星団）である。このような特定の星で星一般を象ったと考えられる。さらに『尚書』堯典の偽孔伝[32]に「星とは二十八宿を蒼龍、朱雀、白虎、玄武の四方の星宿に分けた時、各々に属する七つの星宿の内の中央の一つを言う」とある。昴は白虎の宿の中星、すなわちこの意味の「星」である。甲骨文の星の字はこの意味の白虎の宿の中星、すなわち「星」である昴を表わしたと考えた方がよいかも知れない、と。

昴の星団はすぐ次に引くように七つの星から成ると言われる。星の並び方は図24に引くように不規則であるが、図17、18は七星を図式的に表現したと考えられる。前者は殷後期、安陽侯家荘一〇〇一号墓出土の青銅飾金具である。同じ単位を横に並べて図18のように青銅斧を飾るものもある。同出の青銅器は殷後期の後期のものである。[33]

昴という星について『晋書』天文志、上に「昴の七星は天の耳目、すなわち情報蒐集の係りで、西方を主り、裁判を主

る」[34]という。さきに記したように、刑罰を執行する首斬り斧に有孔斧がある。有孔斧の一種であるこの器に飾られた鼈が、背に鼎の紋様を持つとなると、『晋書』に残る獄事を主るという所伝は周初まで遡る可能性が出て来よう。

図21の鼈の背の小円は、図17、18のもののように規則ではないが、小さい円の集合であることに変りはない。しかし、星の集合とはいっても、鼈の星座は大凡スッポンの円い甲羅を連想させる形を持っているのに、図21で象られているのは不規則な円の集合で、鼈の星座がこのような形に表わされたとは考えにくい。この小円の集合は次に記すように鼎であるとしか考えられない。これは殷人が鼎をもって「星」の字を表わしたのと同じ伝で、鼎の形を鼈の背に象り、これはただの鼈ではなく、星座の鼈だ、ということを示そうとした、と考える他ないであろう。[35]これとは別に、後に図23に引くように、天の鼈の星座を背中に象られた図像もあったのであるが。

すばるという星団は、図24のすばるの写真でわかるように、星の配列は不規則で、大小も色々である。図21の背中の円は、すばるの写生では勿論ないが、小円の大小、配置が少々不揃いなのは、天のすばるが頭にあったからだ、と解される。

鼎については『説文』に「鼎は白虎の宿の星なり」[36]としか言わないが、段玉裁は注に、『詩』召南、小星の伝に「鼎は留である」とあるのを引き、鼎は古語、漢の人はこれを留と呼んだ、という。そして『詩』小星の疏に引く『春秋元命包』に[37]「鼎は六星、鼎の言たる留なり、物成就すれば繫留するを言う」、というのはこの意味だ、と言っている。六つの星が寄っていると言うのは少し大きめの星で、空の条件が良く、目も良ければ他にも沢山の星が固まっているのが見えるはずである。図21の背中の紋様は大小の星をほぼ同じ大きさにして配列したものと言えよう。

この小さい円で表わされた星に気がついて、殷周時代の囧紋を附した鼈の紋様を改めて見なおしてみると、囧紋が小円を周囲に押し除けて中に割り入った型式のものがあることに気附く。図23のごときものがそれである。鼈の背の小さいいぼいぼが図像に小円で写されるという可能性は先に排除した。とするとこれは鼎の星団の中に囧紋が加わったと見ることができるであろうか。鼎は図17、18のように中央に一つ円を加えた形に、図式的に表わされることもあるし、図19(1)、(2)

の甲骨文星字のように、星が環状に並べられることもあるから、中央の空いた所に囧形の図柄を配することもできよう。一方また、囧形の周囲に並ぶ小円の列は、天の髦の星座の星を象ったものと見ることができる。小円の数は一三個ある。[38]『晋書』天文志に一四個というのと小異があるが、一三個とする記録もある。[39]これこそ髦の星座の図像に囧紋を組合せたものと考えることもできる。

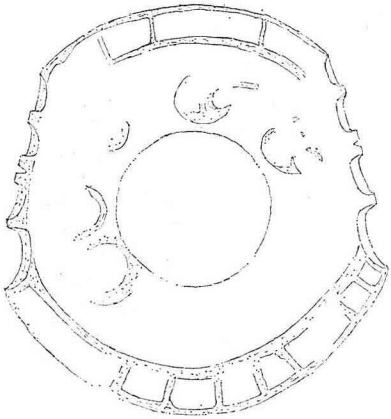
ここではどちらとも決めることはできないが、髦の背中で小さい星の群の中に囧の図柄の加えられたことが知られた。

さて、ここに使われている囧形であるが、『説文』囧部に「囧は窗牖麗廔闒明なるなり。象形。……読むこと獷のごとし。賈侍中の説に読むこと明と同じ」[40]という。囧は象形字で、櫺子窓がからっと内外通っていることで「こう」と読む。賈侍中の説では明と同じ読みだ、という。これが櫺子窓の象形だというのは譌変した字形によった説明であるが、次に引く例で円い孔の代りに囧形の図案になっている所を見ると、窓のぱらっとした格子で内外がからっと通じているという訓詁は、囧の古い意味を伝えたものと言うことができよう。

有孔斧であればそこに円孔のあるはずの位置に、トルコワーズ象嵌で囧紋を表わした例もある（図25）。出土記録はないが器の型式から殷後期のものであることは疑いない。[41]

同じ系統の紋様をつけた類として次のものがある。図26で、京都大学文学部博物館の蔵品。表面は白っぽく風化し、割れ目を接いだあとが安物の朱肉のような色の顔料で隠してある。この遺物には出土地の記録がない。図27は宝雞竹園溝七号墓の出土品で、伴出の青銅器は西周前期前半のものである。[42]両側の鉏牙の型式がこれと合致する所からみて、図26もこれと大体同時代と考えてよかろう。

図26の器は始めに璧を作り、両側に鉏牙を刻み出し、下に刃をつける、といった工程で作られたと思われる。同じ時分の大きな孔を穿けた斧の類の中には、刃と反対側が直線をなし、斧の原形を保つものもある所から考え、この型式は璧の型式を採った斧と言うことができる。



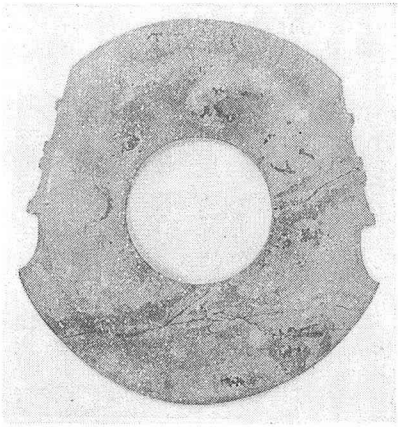


図26　璧形玉斧　西周前期　京都大学文学部博物館

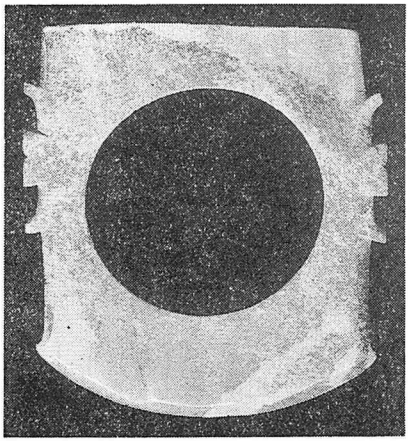


図28　有孔玉斧　西周中期　長安張家坡273号墓

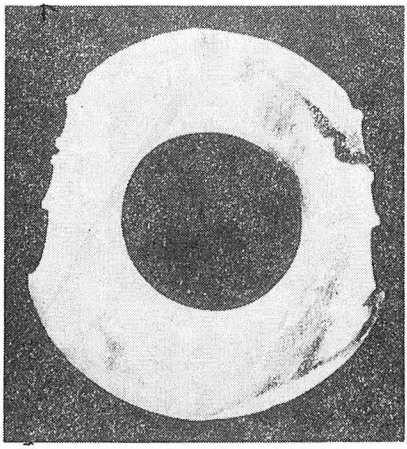


図27　璧形玉斧　西周前期　宝雞竹園溝7号墓

このような作りの遺物は図27の他にも遺物の例があるが、[43]この器が珍しいのは、彩色の跡が淡褐色に残ることである。所々に水銀朱の色の残る所があるから、朱彩であったと思われる。[44]紋様の残りはよくないが、よい方の面についてみると、背と刃の外周沿いに二～三mmの幅の線が引かれ、その内側一cm強の間隔で同心円が描かれる。鉏牙の部分も彩色される。背と刃の部分は間隔を置いて内外円の間をつなぐ放射状の線が加えられる。内圏と孔の間には図26の測図に見るように鉤形の線が残り、浜田氏は囧紋と判断して想像を混えた復原図を示している

が、かなり怪しい。[45] 筆者測図中、左下の彩色は鉤形を成さず、円のごとくである。十分確信を持つことはできないが、仮に囧紋を附けた類としてここに引いておく。

次に図26の放射線。図29は殷後期の青銅製の所謂弓形飾の中央のボタン状の突出部と、その両側の饕餮・人面を持った一対の鬼神の一つの拓本である。ボタン状の部分に円形の凹みがあって、放射状の線が出ている点、図26と共通のデザインと見られよう。放射する線に疏密の差があるが。

図29　弓形器拓本　殷後期

右に記した類とは異なり、刃に大きな円孔を持った玉器の中には、図28のように刃と反対側が直線的になったものがある。長安張家坡一八三号墓の出土品に相近い器があり、同墓出土の青銅彝器は西周中期前半頃の型式をもつ。[46]

以上、孔は障碍がなく、光が通り、明るいだけでなく、殷周時代には潔の意味の明、神明の明等の意味を持ったことが、有孔斧の孔の代りに配される図柄によって知られた。『尚書』皐陶謨に「天の明畏」の語がある。「畏」は馬融、鄭玄のテキストには「威」に作るという。「明」は善を顕わし、「畏」は悪を威す、と解されている。[47] 明は暗に対する明であり、明であることは暗を否定することである。積極的に明を導入することは明ならざるものに打ち勝つことになろう。円い孔「明」に刑殺の季節、秋の白虎（の星座）、その星座群の中星の昴、太陰に帰せられる星座の昴が導入されていることには、明ならざるものに積極的に打ち勝つ、という方面を強調する意図が窺われる。筆者は『尚書』に近づきが少いが、有孔石斧の孔は、この天の「明威」の概念を客観化したもの、と言うことができるのではなかろうか。

次に図30を見てみよう。出土地不明の品で、「内」に附けられた線彫りの饕餮は上下にひしゃげた形になっている。西

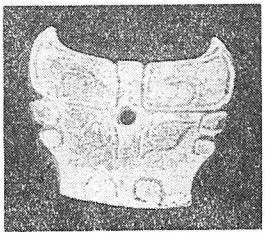


図31　玉犧首　殷後期
益都蘇埠屯

図30　青銅斧　西周前期

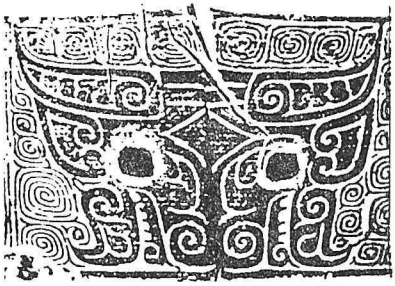


図32　饕餮紋　殷後期　爵

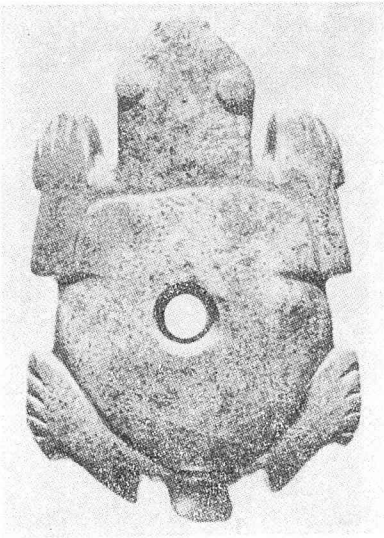


図34　玉鼈　殷後期

図33　神面　良渚文化　玉腕輪　余杭瑤山1号墓

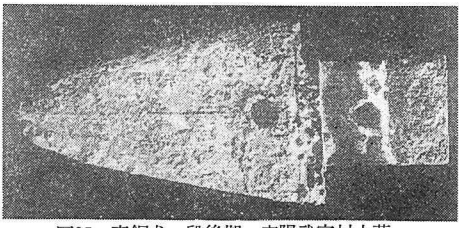


図35　青銅戈　殷後期　安陽武官村大墓

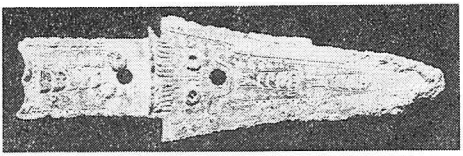


図36　青銅戈　西周前期　宝雞茹家荘7号墓

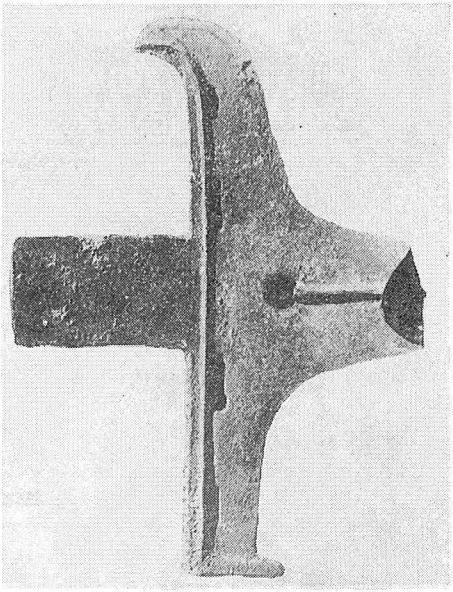


図37　青銅刀戈　西周前期　岐山王家嘴

周前期の晩い時期と見られよう。柄頭の人頭は恐らく図13と同様、髦頭＝昴と思われるが、少々緊りがない。ソケットで柄にとり附けるようになっているが、刃には円孔があり、有孔斧であればそこに孔のあるべき位置に当る。然しそこは飾られた饕餮の眉間である。お決りの位置とは言っても、一寸ひどいではないか。しかしこのように眉間に孔のある饕餮は斧では珍らしいが、このやり方は玉器によくある。図31は益都蘇埠屯の殷後期墓出土の例である。図30と同じ位置に円い孔が穿けられている。釘でも打って、何かに取り附けるためのもの、とも一応考えられるが、それにしては孔が大き過ぎるし、位置も目ざわりである。他の種類の玉器にこういう方式の取り附け用の孔は知られない。他にも同じ位置に孔のある玉器の饕餮は少くない所から考え、これは饕餮面の構成要素と見るべきである。殷周青銅器の饕餮、犧首で、この孔のある位置に極く普通にあるのは菱形である。とするとこの円い孔は菱形に代ってここにあるのであるから、それとほぼ同

じ意味を持つものであったと考えなければならない。饕餮、犧首の眉間の菱形は、以前本誌に記した通り、[49] 殷墟甲骨文、金文の十字形の文字、「甲」字に簡略化され、この甲は曄（光り輝く様、盛んな様）と読みかえることができる。饕餮、犧首の眉間の円孔は、菱形と同様、光り輝くという意味で設けられたに違いない。

それより一〇〇〇年ほど年代の遡る良渚文化の腕輪に刻まれた神の頭であるが、図33のように、眉間の菱形の中に円の入る例がある――通常は菱形だけであるが[50]――。古くから神像の顔に附けられる菱形と円形の図柄の性質の親近であったことを示すものである。

図34は図15の斧の孔に象られるのと似た形の鼈で玉製品である。出土地は不明であるが、彫りからみて殷後期の作である。背中の真中に孔があるのは、これも饕餮、犧首の眉間の孔と同様、象徴的なしるし、と見られる。図15の囧紋の代りである。図25の斧に円孔に代って囧紋が附けられた例を引いたが、図34も同じ互換の例である。

ここで菱形との対比から、円孔が曄といった意味合いを持ったことを知った。日、月、星といった光り輝く天体に関聯する点、それは矛盾ないと思われるが、同時代にどの程度内容的に近似するか、形の相違に応じてどういう相違があったのか等、立ち入った所は今後の研究課題である。

以上、殷周時代の有孔斧の孔が象徴的な意味を持った一種の記号のような意味で附けられたことを知れば、図35～37のような戈や刀戈の類の援に穿けられた孔の意味も類推によって想像することができよう。斧と違って、戈の類は柄に結びつけるのに孔を使うような伝統はなく、その方面からする解釈の余地はないからである。

① 湖北省博物館、北京大学考古専業一九七六、図一〇。
② 湖北省博物館一九七六、図九。
③ 林一九七二、一三一～一三二頁。
④ 林一九八六、一六九～一七二頁。
⑤ 林一九九四、三～二八頁。
⑥ 江西省文物考古研究所等一九九一、一一頁。
⑦ 詹一九九三、図二四。
⑧ 林一九八六、九七頁。
⑨ 張一九九二、一一四～一一五頁。
⑩ 北海道大学水産学部助教授仲谷一宏氏より贈られた。

⑪ 参為白虎、三星直者、是為衡石、下有三星、兌、曰罰、為斬艾事、曰觜觿、為虎首。清水一九四四、一四九頁を参照す。

⑫ 相似た表現は燕域台西村に（河北省博物館、文物管理処一九八〇、図版五一）。

⑬ 林一九八六a。

⑭ 内蒙古自治区博物館一九七八、八七～八九、寧城図。

⑮ 李一九八〇、一〇九頁。

⑯ 「昴、髦頭、胡也、為白衣会」。「白衣会」は天文志の少し先に「木星、与土会……為白衣会、若水」と出てくる。木星が金星と出会うと白衣会であり、大水が出る、という。この白衣会について『史記会注考証』に喪を言う、と解している。白衣冠というと喪服のことである。「白衣会」は白衣冠の人が会合することになる、の意となろう。

⑰ 林一九七二a、二二～二三頁。

⑱ 廿八年「賜東海王疆虎賁旄頭……」の注に『魏文帝列異伝』が引かれ、
秦文公時梓樹化為牛、以騎擊之、騎不勝、或墮地、髮解被髮、牛畏之入水、故秦因是、置旄頭騎、使先駈
と。くわしい物語は『史記』文公二十七年「伐南山大梓、豊大特」の条に記される。

⑲ 李一九八〇、一一〇頁。『南斉書』魏虜伝「魏虜匈奴種也……亦謂鮮卑、披髮左衽、故為索頭」。索頭は辮髪で和林格爾壁画にも見る所だと注意されている。

⑳ 林一九六〇、一〇八～一一〇頁。又林一九八九参照。

㉑ 出光美術館一九八九、図版八八。

㉒ 林一九八六、図版一〇—一〇二～一〇八。

㉓ 林一九八四、盤1—22。

㉔ 林一九八六、一八六～一八七頁。

㉕ 『周礼』大司寇「奉其明水火」疏。

㉖ 林一九八六、一八七頁。

㉗ 鼈十四星、在南斗南、鼈為水蟲、帰太陰、有星守之、白衣会、主有水令、と。これは『大唐開元占経』（『欽定四庫全書』巻六八、七）に引かれる『石氏星経』に「石氏曰、鼈十四星、在南斗……石氏曰、鼈一星去（消え去る）、有白衣之会……石氏讃曰、鼈星為水蟲、太陰也」とあるのに大体拠るものと思われる。『石氏星経』は戦国の書といわれる（上田一九三〇、序）。

㉘ Pope 1935, p. 59 四川省生物研究所、両棲爬行動物研究室一九七七、一七頁。

㉙ Pope 1935. p. 60『中国大百科全書』生物学、八〇頁。

㉚ Pope 1935, Pl. 4.

㉛ 林一九八六、一八九～一九〇頁。

㉜ 『尚書』堯典「厥象日月星辰」の偽孔伝に「星、四方中星」と。

㉝ 安陽市文物工作隊一九九一、図版一〇～一四。図18の文様単位の一個と蕉葉形の一つをとり出した形の紋様をもつ青銅斧がある（中国社会科学院考古研究所安陽工作隊一九九二、図七、下）。中央の円は孔である点図26と共通するが、周囲に使われる円が小粒である。また柄をソケットで装着する方式からみて、北方疆域外の民族の方式をとり入れたものと見られる。

㉞ 『晋書』天文志、上「昴七星、天之耳目也、主西方、主獄事……」

㉟ Allan は（Allan 1991, p. 107）このような鼈の図像の背にある円の意味は知られていない、と言い、漢代画像石の星の表現からの類推で星ではないか、と考えているが、それより先は考えていない。

㊱ 昴、白虎宿星也。

㊲ 昴六星、昴之為言留、言物成就繫留。

㊳ 同じ方式の図柄のもう一例も緑に並ぶ円の数は一三個である（林一

九八六、図一〇―一〇六）。

㊴『太平御覧』巻九三二所引『星経』。

㊵ 囧、窗牖麗廋閭閼也、象形。……読若獷。賈侍中説、読与閼同。

㊶ ほぼ同大で同じ紋様と銘を附けた器が王立オンタリオ博物館にある（White 1956, Pl. 22 A, B）。

㊷ この玉器は卣、尊、觶などを載せた二層台上の漆盤上から発見されている（盧等一九八八、上、図七三。図中の21）。この墓地では他に一三号墓で二層台上の青銅酒器を載せた漆盤上に玉斝の柄形器が発見された例がある（同右、図34、図中の11）。これらの玉器が酒を使う儀礼に使われることのあったものであったことを証する例である。

㊸ 浜田一九三〇、一九～二四頁。他に河南省博物館一九七七、図一〇、西周前期 Salmony 1952, Pl. 14, 1 西周前期、陝西周原考古隊一九七九、図二四、西周中期等。

㊹ 玉器に塗られた朱彩の跡が淡褐色に変色している例は、東京芸術大学蔵の三合璧に画かれた春秋時代の龍紋に見られる（大阪府立弥生文化博物館一九九三、図四二にカラー写真。

㊺ この玉器に塗られた朱彩は、中央の孔の周囲に鉤形の線を並べて囧紋を形成していたごとくである。筆者側図の右上にある二つの鉤形はその残存と解することが可能である。浜田氏が復原図に朱で塗りつぶした葉状の単位を連ねているのは解せない。浜田氏の図を原寸に拡大コピーし、筆者の実側図と重ねてみてもずれが甚大である。

㊻ 中国社会科学院考古研究所豊西発掘隊一九八九、図六、4、図版四。

㊼ 池田一九七六、九九頁。

㊽ 例えば発掘品では陳等一九九三、三九、安陽小屯一一号房子出土、殷後期。戴一九九二、図一八、涇陽高家堡四号墓出土、西周前期。

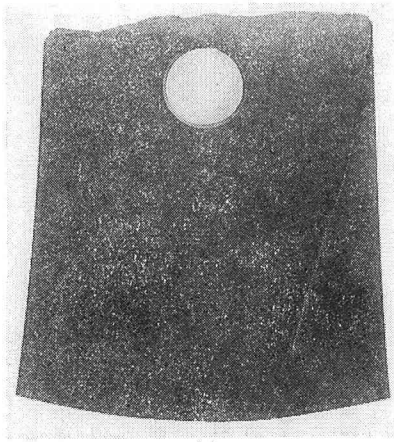
㊾ 林一九九三、一一二～一一五頁。

㊿ 浙江省文物管理委員会等一九八九、二一七～二一八。

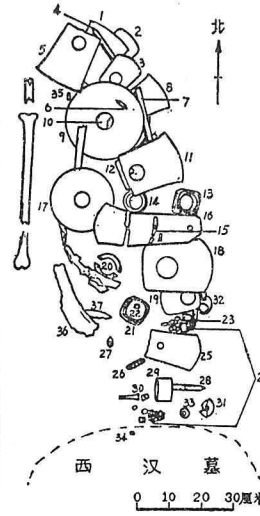
二　良渚文化

この論文で扱っているような、板状の刃の上寄りに円い孔のある石斧[1]は、前四千年紀から三千年紀、揚子江下流の崧沢文化、良渚文化、寧鎮三、四期文化、薛家崗中、晩期文化、同時代の山東の大汶口文化等に顕著な遺物のあることは、よく知られる通りである。この類は良渚文化に顕著で、副葬品の豊かな墓から出土し、美しい石や軟玉を使って作られている所から、軍事、政治的首領のシンボルとする解釈が出されている。[2]楊美莉氏は有孔斧の資料を遺物出土図と共に蒐めていて説得力に富む。[3]筆者も大筋において、こういった研究に賛同するし、書いたこともある。[4]ここで考えようというのは、それの社会乃至歴史の中で演じた役割ではなく、それの象徴物としての機能である。

出土遺物を見てみよう。図38(1)は上海市青蒲県福泉山六号墓の遺物出土図である。南側が頭で、漢墓によってつぶされ

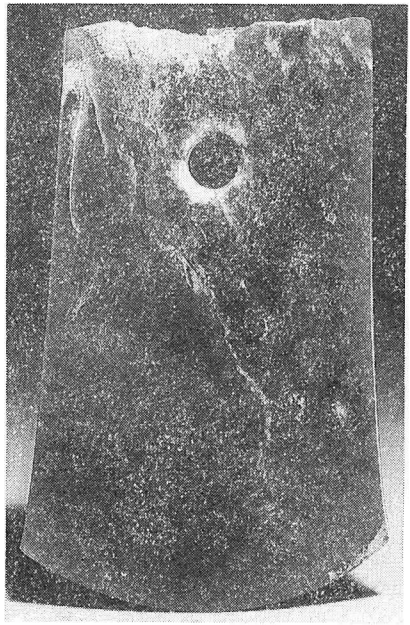


(2)

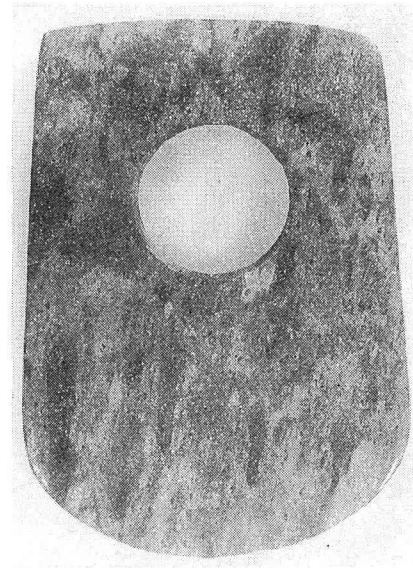


1、2、3、5、8、11、12、18、19.石斧
4、6、7、28.玉锥
9、10、17、37.玉璧
13、14、21、23、26、玉琮
15、30.漏斗形玉管
16、25.玉斧
20.玉镯
22、24、34.玉石珠
27、33.玉坠
29.玉臂饰
31.陶器盖
32.陶盉
35.石坠
36.象牙器

(1)



(4)



(3)

图38　上海青浦福泉山6号墓遗物出土图，出土玉，石斧

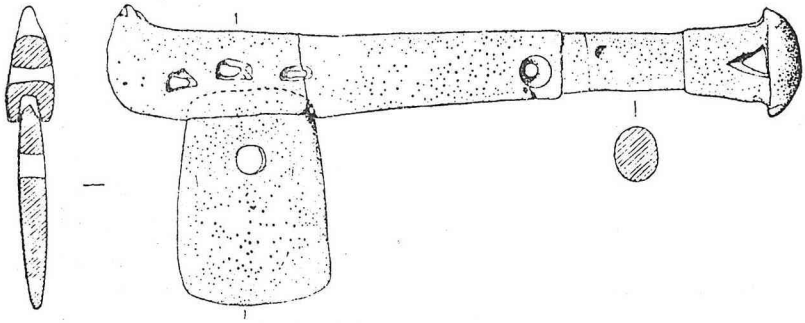
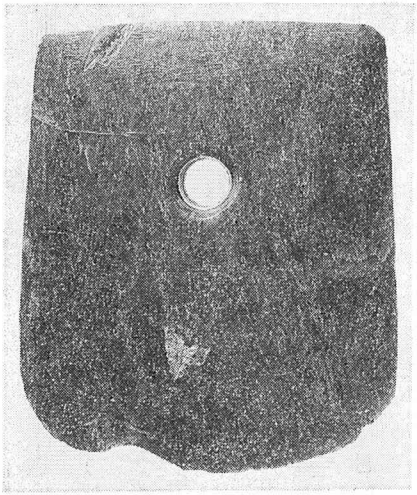


図39　有孔斧陶製模型　海安青墩



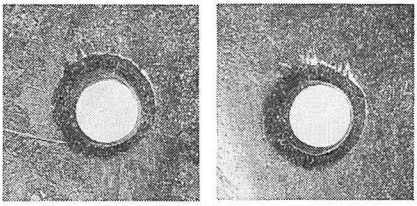


図42　有孔石斧　京都大学文学部博物館

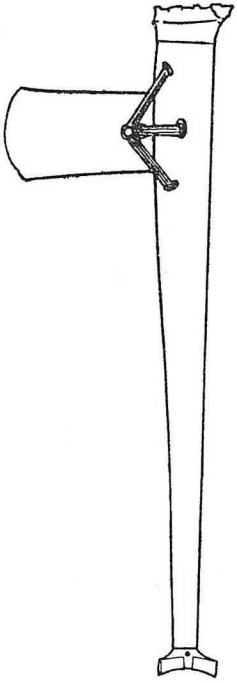


図40　良渚文化有孔斧復原図

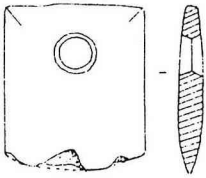


図41　良渚文化有孔石斧　呉江龍南

ているが、胸から下はよく残っている。璧、琮等と並んで玉斧が二、石斧が九個出ている。[5] 出土玉・石斧のうち実物を見たものを紹介しよう。図38(2)は同図(1)中の11。スレートのような均一な質の石で、テカテカに磨かれ、出来たてのようである。刃と反対側は柄の木に嵌められることが予定されていたと見え、粗い磨り痕が残されている。

図38(3)は同図中の18、カフェオレ色と灰色のむらむらのある石で、全体平滑に磨き上げられ、孔から刃と反対側の縁までの間も同様に磨かれている。この器は(2)とは異なり、柄に嵌められることが予想されていないわけである。刃は片側の傾斜が僅かに平ら気味で、刃物の面影を辛うじて留める。刃先は刃が落され、背の側の小口は仕上げてはあるが光沢が出されていない。両側から穿けられた孔の出合った稜角に石の欠けた痕は残るが、円味がつけられている。石斧の中にもこのような柄をすげない象徴品があったのである。

良渚文化の石斧、玉斧の中にはこのように、馬鹿に大きな孔のものがあり、このことは一段階前の崧沢[6]や北陰陽営[7]から顕著に認められる。斧はまるで大きな孔の附属品とでもいわんばかりである。

図38(4)は同図(1)中の25で、胸の辺から出ている。石斧の多い中、これともう一つだけ軟玉製である。これは草色半透明で、褐色の部分がある。(2)、(3)と比べて、孔が程よい大きさの品である。柄に嵌め込まるべき部分は、両端に一cmばかりの本来の小口が残るが、その中間は割れ口がそのままになっている。その割れ口も含め、器全体が手ずれし、柄に嵌めないまま長い間愛玩されたことを想像せしめる点、貴重である。大事にされていた玉器であったこともあってか、死者の胸の上に載せて副葬されていた。[8]

右に引いたような、象徴品としての色合いの濃いものは別にして、良渚文化の有孔玉・石斧は、海安青墩の中文化層から出土した前四千年紀前半頃[9]の陶製模型(図39)によって柄への装着法がわかっている。石斧の刃と反対側を木柄に作った溝に嵌め込み、柄に設けた孔から石斧の孔に紐を通してくくり附けるのである。良渚文化の墓から有孔斧が、その柄の上下の端に附けた玉製の飾りと共にほぼ原位置のまま発見される例があり、張明華はその復原図を作っている。図40はその

一つで、長さ七〇cmばかりである。寸法を比べると図39は実大の四分ノ一ばかりのものと知られる。

こういう社会的地位のシンボルとしての有孔斧が、日常使用する道具を原形として生れたものであることは言うまでもない。図41は呉江龍南の第二期文化の住居地からの出土品で、良渚文化早期に当るとされる。[10] 使っている内に刃を大きく欠いてしまったので捨てられたものと考えられる。村人の実用品に違いない。図42は図41と同じような形の石斧であるが、京大文学部博物館の蔵品で出土地は不明である。これも刃先に長期間の使用によって生じた磨滅の跡が甚だしい。孔の上側には柄と結び合せた紐の磨擦による溝が生じている。図40のようにきちっと三方向にはなっていない。発掘品の石斧を多数観察する機会は未だ得ないが、玉斧は少なからず見ている。玉斧では孔の上側が紐との磨擦で円味を帯びている例は珍しくない。玉は硬いから図42のような顕著な溝にはなっていない。いずれにせよ、紐でこすれて磨滅するというのは、柄に嵌めた石や玉の刃が、多少ともがたぴしし始めて後も、長い間使いつづけた結果である。斧の柄に紐でくくってあるのは、ゆるんだ斧頭を次の一撃まで柄につなぎ留めておくためのものであり、紐を三方向にまわす方法は出来のよいやり方とは思われない。図40のように三方向に向って緊めたところで、左右のものは殆んど利かず、真中の一本だけと大差はないのではないか。これは筆者の長い間の疑問であった。

図43は筆者の作った図39の陶製模型の復原品で、柄の長さ六十数cmである。刃は根府川石（輝石安山岩）、柄はシラカシ。[11] 斧頭のぴったり嵌る枘穴を作るには、勿論鋼鉄の刃物を使って、ほぼ半日を費した。この石斧で直径一〇cmばかりのエノキの立木を切り倒したが、それ位では枘穴もビクともしていない。しかしその後使っていないので、どれ程使うとガタが来るかは不明である。

斧の刃を柄に結びつけるという観点から言えば右の通りであるが、図39のような遺物のあることは確かであり、斧の孔から背の方に向って左右の二方、或いは左右と中央の三本の線の引かれた遺物も少くない。図44は滕県寺村の仰韶、龍山混合遺蹟の出土品で、孔から三本の線があり、斧と柄を連結する紐の痕と解され、両面にあるという。[12] この図は拓本であ

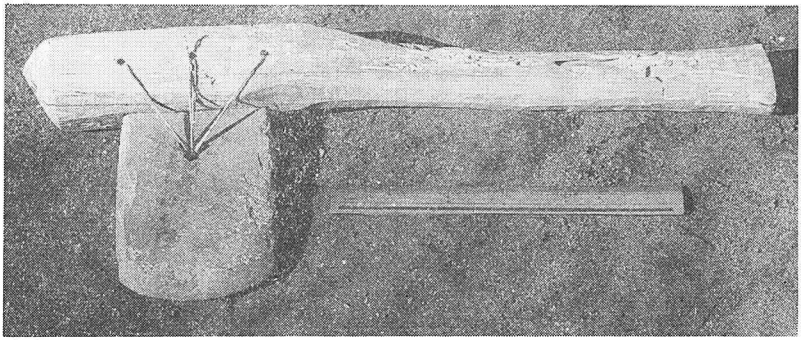


図43　有孔石斧模造品

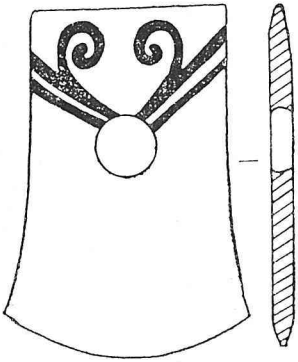


図46　石斧　劃城崗中一期　安鄉劃城崗

図45　石斧　薛家崗三期　潜山薛家崗

図44　石斧　仰韶～龍山文化　滕県寺村

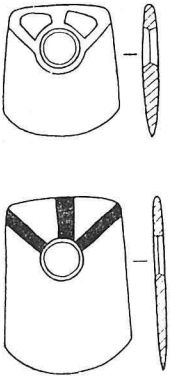


図49　石斧　良渚文化　余杭反山

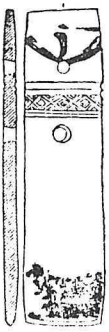


図48　玉斧　二里頭三期　偃師二里頭

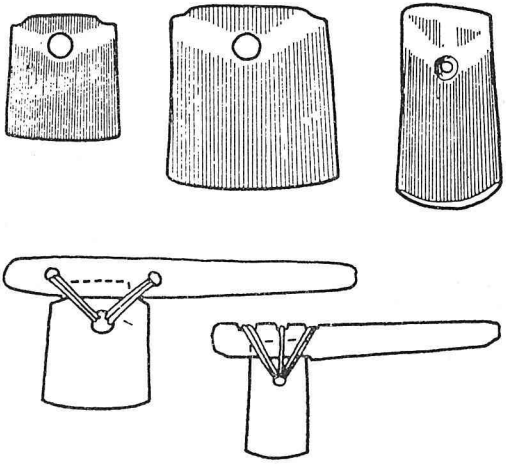


図47　石斧　新石器時代　嘉興，余杭

るから、線は凹になっているのである。図45は潜山薛家崗第三期文化の出土品である。赤で花果図案が画かれる、と記される。[13] 下の孔から左右上方に白抜きの線がある。前四千年紀のものである。図46は安郷劃城崗中一期の遺物。大溪文化中期に当るという。[14] 孔から左右上方に線が引かれ、内向の渦紋が加わる。前四千年紀前半位のものである。図47は嘉興、余杭の発見例で、柄に縛りつけた痕が残る、と報告され、[15] 下図のような復原図が示されている。痕がどのように残っていたかは記されない。図48は偃師二里頭三区二号墓出土の玉斧。上側の孔から上方に朱で三本の線が引かれている。この玉斧はその型式や二つの孔の間の雷紋等から、龍山晩期のものと知られる。[16] 図49は余杭反山の良渚文化墓地の出土品。上図には孔の周囲および輻射状の線が、朱で描かれ、下図にも輻射状の線が描かれている。

有孔斧の孔から上方斜めに引かれた線は余杭反山一二号墓から発見された巨大な鉞にもある。実物を見た所を記すと、図50(2)の見取図でわかるように、刃から少し入った所、一側寄りに神面、その反対側に一種の鳥形が浮彫りされ、周囲の地より三㎜ほど高くなっている。この神面は同墓出土の琮王（琮の王様）の四隅の突出部に挟まれた神面と同じ型式のものである。この浮彫の図像の周囲の地はぴかぴかに磨きがかけられている。この玉斧には有孔玉斧にしては小ぶりの孔があるが、孔から柄の附く側の両角に向って、三㎜ばかりの間隔で細い平行線が刻されている。よく注意しないと見落すような細い線で、『文物』に発表された図には落ちている。[17] 柄の附く側の端の近くは、写真でもわかるように、原石のざらざらの面が残るが、それから内は磨きがかけられている。しかし先の細い平行線までの間は、研磨材の斜めの磨り跡が少し残り、平行線から刃までの間と比べ、最終的な仕上げの手間が省かれている。そしてこの部分には何かの腐ったあとのような、茶色のしみが残っている。筆者の見学につき合ってくれた王明達氏は、この器の平行線について、これはここにかけられた紐が滑るのを防ぐものだ、という牟永抗氏の意見のあることを教えてくれた。それは兎も角、朱の線と違ってひどく目につきにくいものである点に特色がある。

図49以後に発表されたものを張明華氏の論文から図51に引いておこう。図52は図51左上の器の図で筆者が上海博物館で

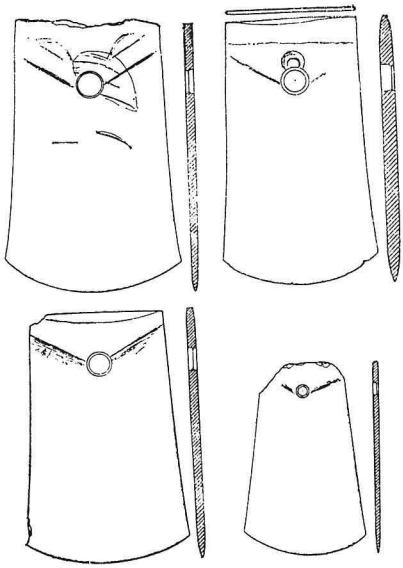
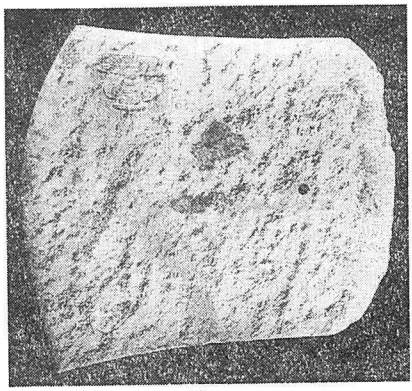
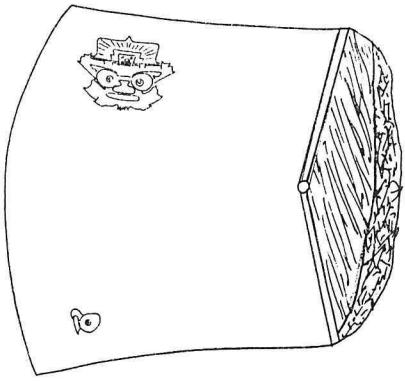


図51　玉斧　良渚文化　上海青浦福泉山



(1)



(2)

図50　玉鉞　良渚文化　余杭反山12号墓

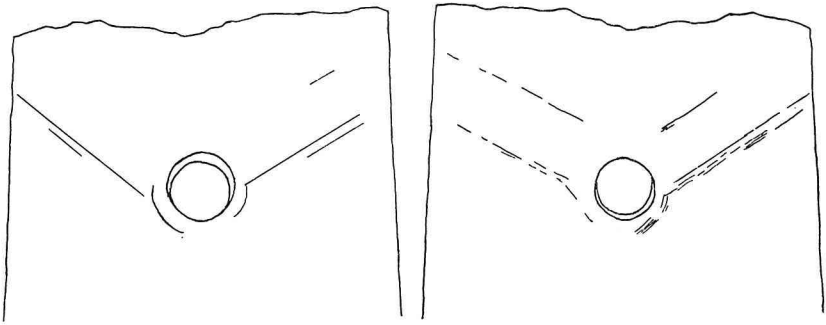
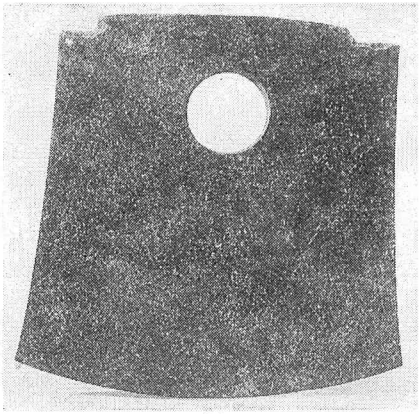


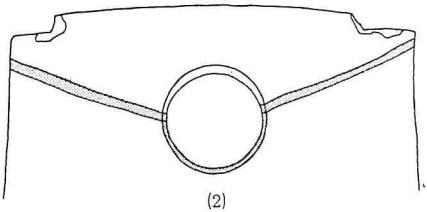
図52　玉斧　良渚文化　上海青浦福泉山６号墓

描いたもの。写真は図38(4)に掲げてある。筆者の見た所では一方の面の刻線は孔の近くから孔の縁に間隔を置いて孔を半廻りし、反対側の刻線にも同様な線の一部が残っている。上海博物館で見せてもらった福泉山の石斧では、図53のように朱で線の引かれたものもある。写真は白黒なのでわかり難いが、同図(2)の図に示したように、孔の下側三分ノ二強は孔の壁にも朱が附いていた。前引図49上がこれと同方式である。

さて、図39の海安の陶製模型、図43の実大復原品を見るまでもなく、斧身の嵌め込まれる木の柄には当然かなりの厚さがあり、孔と柄を結ぶ紐は、孔をくぐって後、直ちに斧身から離れて柄に向うことになる。儀仗用の極くちゃちな柄が附けられたとしても同じことである。そうすると、図50に引かれたような細い刻線は実用的機能を持たない装飾だと考えなければならない。描かれた朱の線も勿論そうである。海安の例をみると柄の紐を通す孔は三個ある。斧身の孔から紐が三方に出たに違いない。三本の線の引かれた例は図48、49等他にも例がある。一方、中央の線が欠け、左右二本だけが描かれる例も少くない。図45～47、51等である。これはどういうことか。図50の玉斧もその類であるが、先に左右の細い線に挟まれた孔の上方の部分の磨きが不十分であることに注意した。その辺には木の柄が突出して、斧身を深く挟み込むような作りになっていたことが考えられる。そこに附着した染みがそのことを想像せしめる。斧身の孔の上方には中央の線をかき込む余地がなかったのであろう。図53など朱彩の例では、朱は左右の線に合わせて、中央の紐の上に直接塗られたに相違ない。そうとすれば、図50、52などの刻まれた平行



(1)



(2)

図53　石斧　良渚文化　上海青浦福泉山144号墓

線の場合も、それだけで装飾というわけではなく、そこに朱でも塗る時の目印程度のものであった、と解せられる。

細い刻線は朱を入れる時の目印としてわかったとして、それでは刻線や朱線は斧身を柄に縛る紐を装飾化したものと考えてよいであろうか。図49上および図52で刻線が孔の周囲を、孔の口から少し間隔をとってめぐり、図53では孔の内壁を三分ノ二ほど周っていることは、そういうことでは解釈できない。斧身の孔の刃寄りの側は、柄に縛る紐と関係がない部分だからである。今問題の装飾が柄にとりつける装置から生れたものと考えることに、そもそも問題があるのではないか。

然りである。有孔斧の中には、前引図38(2)、(3)のように、紐を通して柄に縛るという目的から生れたにしては、ばかに大きなものがあって、象徴的な意味を荷ったであろうことを想像せしめるものがあった。それが何を象徴したかを示してくれる遺物がある。学術発掘の品ではないが、図54～56の有孔石斧である。台北の林燿振氏の蒐集品である。[18] 図54、55では良渚文化の琮等に多い暈のある目を持った神面が浅い浮彫りで、図56では白目のある目を持った神面の目だけが刻まれている。このような例は今まで見たことがないが、前二者の微妙に歪んだ良渚文化の卵形の目は、偽物作りには彫れないと思われる。これらで神面の額の所にある円い孔は、良渚文化の逆梯形器、例えば図57の神面の額にある横長の孔隙に当るものである。この横長の孔が良渚文化の遺物の上で円に表わされることがあり、それが河姆渡文化の骨製の匙[19]に彫られた、双鳥に負われる日、月の円盤に由来するものであることは、先に筆者の記した所である。[20] そのあらましを記すだけでかなりのスペースをとるので、ここでは略させていただく。

これらの石斧の彫刻により、有孔石斧の孔が日、月の神の光明を表現していたことが証される。その孔に光線を表わす放射状の線が加えられることがあるのは極めて当然のことである。先に見たような、有孔斧の孔の周囲が朱でなぞられ、三本の朱線がここから放射状に出る、というデザインは、この日、月神の象徴をここに実現するために加えられたのである。

円とその上に放射状に出る三本の朱線を見て直ちに思い浮ぶのは「皇」字の金文である。[21] 図19(3)と書かれる。図19(4)は

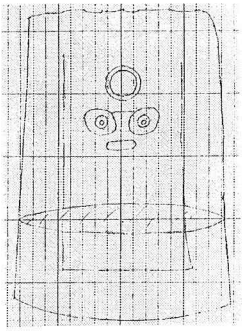


図55　石斧　良渚文化　林耀振先生蒐集品（×1/3）

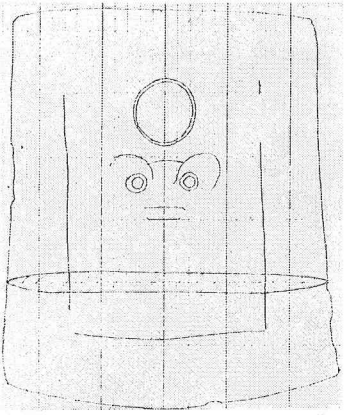


図54　石斧　良渚文化　林耀振先生蒐集品（×1/3）

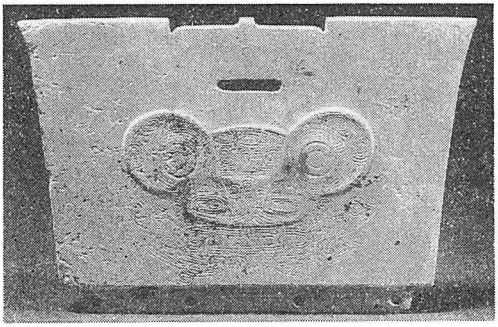


図57　逆梯形器　良渚文化　余杭反山

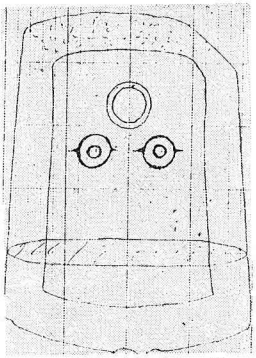


図56　石斧　良渚文化　林耀振先生蒐集品（×1/3）

日月の日である。日の上に三本の線が出ていて、今の玉斧の孔と三本の線に対応している。皇字について郭沫若は師旋簋（乙）の銘文中の、王からの賜り物「盾生皇画内」の句に関聯して次のように言う。[22]

『周礼』春官、楽師に皇舞があり、鄭司農は「皇舞者は羽をもって頭上に冒覆す」という。古人は羽根を頭に飾るのを皇と言ったに違いない。後に実物の羽根が画紋に変り、これも皇と言った。そして引伸して輝煌・装美・崇高等の意味になった、と言うのである。そういったことで良いであろう。ただ、文字の成り立ちとして、何故日から光輝が上方にのみ出、下に「王」が附いているのか、ということは「皇」の意味とは別に説明されな

図58　青銅斧　殷後期

ければならない。日から上方に光輝が出ている図像は、今の良渚文化の孔と、それから朱線が放射状に出る形と合致している。ただし何故四方に光線が出ず、上方だけにそれがあるかは、差当り説明が難かしいが。

なお、漢代の学者の解釈では、皇舞の舞者は頭に羽根をかぶると考えられているが、前引の玉斧の孔から出る線は直線である。これは羽根と認めることはできない。羽根であれば撓うはずだからである。これは良渚文化の支配層の人が頭に着けた、羽根を象る錐形器と見るべきである。錐形器については本誌に記したことがあるので、[23] ここにはくり返さない。

それでは「皇」字は何故「王」に従っているのか。「皇」字は西周より古い資料がなく、ここで扱っている資料は良渚文化のもので、その間千五百年以上の資料の空白がある。しかしこの論文で問題にしている有孔石斧一つをとっても、良渚文化から殷まで存続し、それに附随した観念の存続も想定さるべきである。西周の文字の成り立ちの説明に良渚文化の遺物を参考にすることも、不当とは言えないであろう。

林澐[24]は言う。甲骨文の「王」字を図19(5)〜(7)等の形に作る。図19(5)形は図19(8)字の上半分を竪向にしたもので、柄をつけない斧身を象ったものだ。図19(6)と上に横画の一本加わるのは図19(8)を(9)と書くのと同例であり、図19(5)形の横線は闌を象ると見た。そして王の音は『詩』大雅、公劉の毛伝に「揚は鉞なり」[25]という揚から転じたものだ、と。

思うに、殷墟甲骨文「王」字を柄をつけない青銅斧頭と見たのは正しいが、上の一ないし二本の横画を闕、すなわち斧の内と刃の間にあって刃より横に突出した部分と見るのは如何であろうか。横画が一本の場合はそれでも通ずるが、二本になると無理である。西周の図像記号に図19⑽のようなものがある。これは図58の管状の銎を持つ型式の青銅斧を象ると見る他ない。図19(6)、(7)の体はこのような型式の斧の象形が簡略化されたものと見れば説明がし易い。図58のような型式のものが遺物として稀であるのは何故であるのか、現在の所説明が難かしいが。

字形と遺物の対応について多少の問題があるとはいえ、林澐氏の「王」字が柄を附けない斧身を象ると見た点は間違いないと考える。

良渚文化の玉・石斧に残る「皇」字の上半は、本来玉・石斧の上部に飾られたのであるが、斧の象形字の中にこれを書き込むのは困難である。そこで「皇」の上半の象形の下に斧を象る「王」を書き加えた、というのが皇字だということになる。

以上の解釈に誤りないとすると、玉・石斧に設けられた孔から、一本の紐でなく三本の紐が柄に向って結ばれていた理由が明らかになるであろう。この日、ないし月を象る孔と共に三本の紐でもって「皇」字の上半の図形を構成したかった、ということである。

① 孔があっても上端近くに小さく穿けられ、刃の方に向って幅の大きく拡がる類はここでは扱わない。例えば仰韶文化にあるような類（中国社会科学院考古研究所一九八三、図版七一、5、8）。

② 佐川一九九二、五一七～五二三頁。岡村一九九三、一二五二～一二五四頁。張一九八九、六三二～六三四頁。

③ 楊一九九五、二二六～二四〇頁。

④ 林一九九五、一一三～一一四頁。

⑤ 上海市文物保管委員会一九八四、一頁。

⑥ 上海市文物保管委員会一九八七、彩版一、2。

⑦ 南京博物院一九九三、図版六、七。

⑧ この墓からは図38(1)中の36に象牙器が出土している。玉琮等にあるような神面が刻されている（張一九八九、図八）。張明華はこの象牙製品を図38(4)の玉斧頭の柄と考え、想像復原図を作っている（張一九八九、図一一、4）。出土状態を見ると図38(1)の36が象牙製品、25が玉斧で少々離れすぎている上、両者の方向もちぐはぐである。良渚文化の墓で撹乱されていない場合、柄頭、柄下端の飾りが略々原位置か

ら発見される例が幾つかあることは張氏も引く通りで（張一九八九、六三一～六三二頁）、これは通例に外れている。

⑨ 南京博物院一九八三、一五四頁。

⑩ 蘇州博物館等一九九〇、二六頁。

⑪ カシ材は筆者の住む藤沢の材木屋で現在売っていないので、庭の立枯れの木を利用した。使える部分の寸法が足りなかったので柄が少し短い。

⑫ 山東大学滕県考古調査小組一九五八、五一頁。

⑬ 安徽省文物工作隊一九八二、三〇八頁。

⑭ 湖南省博物館一九八三、四六五頁。

⑮ 牟一九八四、九頁。

⑯ 林一九九六。

⑰ 図50(2)のもとの図。この図には筆者がかき込んだ。

⑱ 嘉興附近での出土品ときく。

⑲ 林一九九一、図四—三九。

⑳ 同右、二九八頁。

㉑ 殷墟甲骨文にはない。

㉒ 郭沫若一九六五、五頁。

㉓ 林一九九三、九五～九七頁。

㉔ 林澐一九六五。

㉕ 「弓矢斯張、干戈戚揚」毛伝「揚、鉞也」。

三　結　び

道具というものは良質の材料を選び、作りも良いこと、それを使う人間の腕がしっかりしていることが大切である。しかしその使用の結果が命や名誉にかかわる場合ともなれば、やはり神仏の加護がなければならない。『平家物語』で扇の的が船上でゆれ、狙いが定め難い時、那須与一は「南無八幡大菩薩……」と複数の神仏に呼びかけて祈った。日常使用する斧でも、いざという時武器に使う類には、天の日月の神を象徴するマークを附けておいた、というのが有孔斧の起りである。孔の下にそれの象徴する神の像を彫ったものがあるが、日常使用する斧ではすぐ傷んでしまうから、それは略されていると考えられる。図57に引いたような逆梯形器で、神面の彫ってないものが沢山あるが、そういうものの中には顔料を使って顔が描かれていたのが剥落したものがあるに違いない。有孔斧でも同様剥落したものの存在を想定すべきであろう。顔の有無はしかしどうでもよい。円孔だけでそこに神の存在は示されているのだから。

良渚文化は前三千年紀の晩い時期に滅亡し、その玉器文化も消滅する。そこで多数作られた璧、琮も、似た型式の器が

華北の龍山文化で作られ、殷文化にも及ぶとはいえ、伝搬した系統がたどられるというには程遠い。有孔玉・石斧は、大汶口文化はじめ華北にも少なからず遺物が知られるとはいえ、[1]各文化のものの相関関係については璧、琮と事情は変りない。しかし良渚文化の神面と殷周の饕餮面とは、両者に継承関係のあったことを示す適切な証拠と言えよう。[2]殷周の饕餮が額の菱形の代りに、有孔斧と同じ円孔を額に持つ例のあることは、本論文で新たに指摘した所である。良渚文化の神面が有孔斧に飾られ、額に円孔を持つ形をとるもののあることは、図54～56に引いた通りであるが、これらの例は、中間の年代に属する遺物が現在知られていないとはいえ、良渚文化の伝統が殷周文化の饕餮に引きつがれていることの傍証と言うことができよう。良渚文化の神面は日と月の神であり、殷代の饕餮は「帝」で、同時代の最高神であって、[3]夫々の時代における神としての格において匹敵している。

一方、殷周時代の有孔斧、それをも含めた鉞の類を検討してみて興味深いのは、それらの遺物の中に、従来知られてはいてもその性格のはっきりとは知られていなかった神や記号が顔を出すことである。図7、8、10等殷周の斧の孔に飾られ、また刑罰用の鉞に附けられることによって、それが西方、秋の星座群の虎、オリオン座の白虎であることが知られる類がそれである。殷周青銅器に出てくる他の虎も、ただの虎でなく星座の虎で、刑殺を司る神の虎であることが推察される。

図7と同じように青銅斧の孔の中に飾られる図15のスッポンも、同様にしてただのスッポンではなく太陰に帰せられる星座の鼈の図像であることが知られる。小さい円の集合した図形が「星」の図であることは以前に推測した所であるが、有孔斧の柄頭に飾られている戎の像もただの人像ではなく、西方を主り、裁判を主る昴の星の像であることが知られるのもそれである。有孔斧に、このように殷周時代になって裁判、刑殺に関係づけられる図像が加えられるようになることは、世の中が多様化し、その方面を司る神も分化してきたことを物語るものと考えられる。

有孔玉・石斧で孔のあった個所が更に虎の牙、鮫の歯のむき出しになった口になり、象徴は更に露骨になる。昴も小さ

い星が固まっただけの図像では物足りなくなってか、恐ろしい形相の野蕃人の頭でもって表現されるようになる。大型の青銅鉞が生れ、足切りや首斬りがどしどし行われるようになり、ただの円い孔ぐらいでは人が怖いと思わなくなったせいででもあろうか。

有孔斧の円孔は象徴的図像とは別に次第に大きくなり、図28の西周中期前半頃の玉斧の孔の径は斧身の横幅の七割にも達している。しかしバブルではないが、ここが有孔斧の最後である。青銅器上の伝統的な図像類も、この時代以後急速に消滅して新しいものに変る。

① 楊一九九五、総図版。
② これについては林一九八六、四三～六五頁。
③ 林一九九三、七八～一一一頁。

図出所目録

図1 李一九八五、二二。
図2 山東省博物館一九九一、三九。
図3 《中国文物精華》編輯委員会一九九〇、三九。
図4 樋口隆康氏写真。
図5 京都大学人文科学研究所考古資料。
図6 筆者写真。
図7 陝西省博物館等一九七九、一〇六。
図8 《河南出土商周青銅器》編輯組一九八一、三四六。
図9 筆者写真。
図10 中国社会科学院考古研究所一九八〇、図六六。
図11 Deydier 1955, 12.
図12 出土文物展工作組一九七二、八八頁。
図13 盧等一九八八、上、図六〇、下、図版二六、2～4。
図14 中国社会科学院一九八〇、図八〇。
図15 李一九九四、二四三。
図16 上田一九三〇、附図より。
図17 梁、高一九六二、下、図版二五二、1。
図18 安陽市文物工作隊一九九一、図版一五、5。
図19 (1) 乙六六四 (2) 前七、二六、三 (3) 大系図六三 (4) 金文編四五五頁 (5)、(6) 甲骨文編一、八 (7) 甲三九四〇 (8)、(9) 金文編一〇一四頁 (10) 金文集成四、二三一九。
図20 四川省生物研究所、両棲爬行動物研究室一九七七、図一七。
図21 林一九八六、図一〇—九八。
図22 林一九八六、図一四—二。
図23 林一九八六、図一〇—一〇三。
図24 平凡社『国民百科事典』四、三八〇頁。
図25 Karlgren, Wirgin 1969, Pl. 52.
図26右 筆者写真。

図26左　筆者図。
図27　盧等一九八八、下、図版六〇、4。
図28　陳等一九九三、二一七。
図29　上海博物館青銅器研究組一九八四、図九八六。
図30　梅原一九三三、七、九七。
図31　山東省博物館一九九一、一一八。
図32　林一九八六、図二—四九三。
図33　浙江省文物考古研究所等一九八九、一〇三。
図34　Stanford University Museum 1958, 39.
図35　郭一九五一、図版二四、1。
図36　盧等一九八八、下、図版五〇、2。
図37　陝西省博物館等一九六〇、図二五。
図38　上海市文物保管委員会一九八四、図二。『上海博物館展』32、33、牟等一九九二、一三三。
図39　南京博物院一九八三、図一〇。
図40　張一九八九、図一一、3。
図41　蘇州博物館等一九九〇、図四四、5。

引用文献目録

安徽省文物工作隊一九八二「潛山薛家崗新石器時代遺址」『考古学報』一九八二、三、二八三～三二四頁。
安陽市文物工作隊一九九一「殷墟戚家荘東二六九号墓」『考古学報』一九九一、三、三二五～三五二頁。
池田末利一九七六『尚書』（『全釈漢文大系』11）東京。
出光美術館一九八九『出光美術館蔵品図録、中国の工芸』東京。
上田穣一九三〇『石氏星経の研究』（『東洋文庫論叢』一二）東京。
梅原末治一九三三『欧米蒐儲支那古銅精華』京都。

図42　京都大学人文科学研究所考古資料。
図43　筆者写真。
図44　山東大学滕県考古調査小組一九五八、図四、1。
図45　安徽省文物工作隊一九八二、図二四、4。
図46　湖南省博物館一九八三、図二一、4。
図47　牟一九八四、図四。
図48　中国社会科学院考古研究所二里頭隊一九八三、図一〇、7。
図49　浙江省文物考古研究所反山考古隊一九八八、図一〇、5、6。
図50　同右、彩色挿頁一、2、図二六。
図51　張一九八九、図一、2～5。
図52　筆者図。
図53　楊一九九五、彩色図版七七、筆者図。
図54　筆者図。
図55　同右。
図56　同右。
図57　浙江省文物考古研究所等一九八九、一一五。
図58　Loehr 1956, Pl. 7.

大阪府立弥生文化博物館一九九三『平成五年秋季特別展——弥生人の見た楽浪文化』和泉。
岡村秀典一九九三「中国新石器時代の戦争」『古文化談叢』三〇、下、一二四五～一二五九頁。
《河南出土商周青銅器》編輯組一九八一『河南出土商周青銅器』北京。
河南省博物館一九七七「河南省襄県西周墓発掘簡報」『文物』一九七七、八、一三～一六頁。
河北省博物館、文物管理処一九八〇『河北省出土文物選集』北京。

郭宝鈞一九五一「一九五〇年春殷墟発掘報告」『中国考古学報』五、一～六一頁。
郭沫若一九六五「長安張家坡銅器群銘文滙釈」『長安張家坡西周銅器群』一～八頁。
湖南省博物館一九八三「安郷劉城崗新石器時代遺址」『考古学報』一九八三、四、四二七～四七〇頁。
湖北省博物館一九七六「盤龍城商代二里岡期的青銅器」『文物』一九七六、二、二六～四一頁。
湖北省博物館、北京大学考古専業一九七六「盤龍城一九七四年度田野考古紀要」『文物』一九七六、二、五～一五頁。
江西省文物考古研究所、江西省新干県博物館一九九一「江西新干大洋洲商墓発掘簡報」『文物』一九九一、一〇、一～二三頁。
佐川正敏一九九二「中国新石器時代武器浅探――黄河・長江下流域を中心に――」『加藤稔先生還暦記念、東北文化論のための先史学歴史学論集』五一五～五三〇頁。
佐原真一九九四『斧の文化史』(『考古学選書』(6) 東京。
山東省博物館一九九一『山東省博物館蔵品選』
中国文物精華編輯委員会一九九〇『中国文物精華』一九九〇、北京。
山東大学滕県考古調査小組一九五八「滕県新石器時代遺址調査」『文物参考資料』一九五八、一、五〇～五二頁。
四川省生物研究所、両棲爬行動物研究室一九七七『中国爬行動物系統検索』北京。
上海市文物保管委員会一九八四「上海福泉山良渚文化墓葬」『文物』一九八四、二、一～五頁。
上海市文物保管委員会一九八七『崧沢――新石器時代遺址発掘報告』北京。
上海博物館青銅器研究組一九八四『商周青銅器紋飾』北京。
『上海博物館展』(展覧会カタログ) 一九九三、東京。
出土文物展工作組一九七二『文化大革命期間出土文物』第一輯、北京。
浙江省文物考古研究所、上海市文物管理委員会、南京博物院一九八九『良渚文化玉器』北京、香港。
浙江省文物考古研究所反山考古隊一九八八、「浙江余杭反山良渚墓地発掘簡報」『文物』一九八八、一、一～三一頁。
陝西省考古研究所、陝西省文物管理委員会、陝西省博物館一九七九『陝西出土商周青銅器』(一)、北京。
陝西周原考古隊一九七九「陝西扶風齊家一九号西周墓」『文物』一九七九、一一、一～一一頁。
陝西省博物館、陝西省文物管理委員会一九六〇『陝西省博物館、陝西省文物管理委員会蔵青銅器図釈』北京。
詹開遜一九九三「新淦大墓出土的青銅礼器」『故宮文物月刊』一二〇、六～八九頁。
蘇州博物館、呉江県文物管理委員会一九九〇、「江蘇呉江龍南新石器時代村落遺址第一、二次発掘簡報」『文物』一九九〇、七、一～二七頁。
戴応新一九九二「澄陽高家堡商周墓群発掘記、続三」『故宮文物月刊』一一六、三四～四四頁。
中国社会科学院考古研究所一九八〇『殷墟婦好墓』北京。
中国社会科学院考古研究所一九八三『宝雞北首嶺』北京。
中国社会科学院考古研究所安陽工作隊一九九二「一九八〇年河南安陽大司空村M五三九発掘簡報」『考古』一九九二、六、五〇九～五一七頁。
中国社会科学院考古研究所二里頭隊一九八三、「一九八〇年秋河南偃師二里頭遺址発掘簡報」『考古』一九八三、三、一九九～二〇五、二一九頁。

中国社会科学院考古研究所豊西発掘隊一九八九「長安張家坡M一八三西周洞室墓発掘簡報」『考古』一九八九、六、五二四～五九二頁。
張明華一九八九「良渚玉戚研究」『考古』一九八九、七、六二四～六三五頁。
張明華一九九二「良渚古玉綜論」『東南文化』一九九二、二、一一二～一一九頁。
陳志達、方国錦一九九三『中国玉器全集』二、北京。
内蒙古自治区博物館一九七八『和林格爾漢墓壁画』北京。
南京博物院一九八三「江蘇海安青墩遺址」『考古学報』一九八三、二、一四七～一八七頁。
南京博物院一九九三『北陰陽営——新石器時代及商周時期遺址発掘報告』北京。
浜田耕作一九三〇「戚璧考——附瑲璣——」『東洋美術史研究』一九四三、東京、一七～三八所収。
林巳奈夫一九六〇「殷周時代の遺物に表わされた鬼神」『考古学雑誌』四六、二、一〇五～一三二頁。
林巳奈夫一九七二『中国殷周時代の武器』京都。
林巳奈夫一九七二a「西周時代玉人像の衣服と頭飾」『史林』五五、二、一～三八頁。
林巳奈夫一九八六『殷周時代青銅器紋様の研究——殷周青銅器綜覧二——』東京。
林巳奈夫一九八六a「神なる虎豹と人間形鬼神」『泉屋博古館紀要』三、三～三二頁。
林巳奈夫一九八九『殷周の「天」神』『古史春秋』六、二～二五頁。
林巳奈夫一九九一『中国古玉の研究』東京。
林巳奈夫一九九三「饕餮＝帝補論」『史林』七六、五、七八～一一八頁。
林巳奈夫一九九四「華中青銅器若干種と羽渦紋の伝統」『泉屋博古館紀要』一〇、三～六八頁。
林巳奈夫一九九五『中国文明の誕生』東京。
林巳奈夫一九九六「関於偃師二里頭遺址発現的玉器」『国立台湾大学美術史研究集刊』三、一～四〇頁。
牟永抗一九八四「浙江新石器時代文化的初歩認識」『中国考古学会第三次年会論文集』一～一四頁。
牟永抗、雲希正一九九二『中国玉器全集』1、石家荘。
楊美莉一九九五『中華五千年文物集刊、玉器篇、三』台北。
李逸友一九八〇「略論和林格爾東漢墓壁画中的烏丸和鮮卑」『考古与文物』一九八〇、二、一〇九～一一二頁。
李学勤一九八五『中国美術全集』青銅器（上）北京。
李西興一九九四『陝西青銅器』西安。
梁思永、高去尋一九六二『侯家荘、一〇〇一号大墓』台北。
林澐一九六五「説〝王〟」『考古』一九六五、六、三一一～三一二頁。
盧連盛、胡智生一九八八『宝雞茹国墓地』北京。
Allan, Sarah, 1991: *The Shape of the Turtle: Myth, Art and Cosmos in Early China*, New York.
Deydier, Christian, 1955: *Le banquet des Dieux, Ritual Bronzes of Ancient China*, London.
Karlgren, Bernhart, Wirgin, Jean, 1969: *Chinese Bronzes, The Natanael Wessén Collection*, Stockholm.
Loehr, Max, 1956: *Chinese Bronze Age Weapons*, London.
Pope, Clifford H., 1935: *The Reptiles of China, Turtles, Crocodilians, Snakes, Lizards (Natural History of Central Asia, vol. X)*, New York.
Salmony, Alfred, 1952: *Archaic Chinese Jades from the Edward and Louise B. Sonnenschein Collection*, Chicago.

Stanford University Museum, 1958: *Arts of the Chou Dynasty, February 21 to March 28, 1958* (Exhibitiion catalogue), Stanford.

White, W. C., 1956: *Bronze Culture of Ancient China*, Toronto.

(京都大学名誉教授)

Concerning the Symbolic Meaning of Stone and Jade Axes with Hole in Ancient China

by

HAYASHI Minao

The tradition of constructing stone and jade axes with hole originated in the neolithic age and continued through the bronze age culture of the Shang-Zhou eras. These axes are pierced by a large hole which was too large to have been used for utilitarian purposes, such as attaching a handle. Instead, this hole is infused with symbolic meaning. By comparing a neolithic axe with rays extending from the hole in three directions and another axe, dating from 3000 BC, which represents a divine visage, one can ascertain that the hole represents the light of the sun and moon, which is symbolic of the deity. Some executioners' axes, of a simlar pattern and dating from the Shang-Zhou eras, have a hole decorated with either a shark's or tiger's mouth. At times, a small tiger or turtle signifying a zodiacal deity which symbolize execution and big *Yin* (陰) respectively, ornament the inside of the hole. Furthermore, on some axes, the hole has been replaced by the character for brightness (明), a motif which implies that the axes symbolized the 'promotion of good and chastisement of evil' (明畏).

The Nature of the *Kinai* (畿内) Region and its Role in Ancient Japan

by

YOSHIKAWA Satoshi

The *Kinai* region of central Japan, near the capital, varied significantly from other administrative areas. Only the *Kinai* was solely taxed with a corvee (zōyō 雑徭), thereby providing labor which directly sustained the polity. As this corvee became increasingly burdensome,